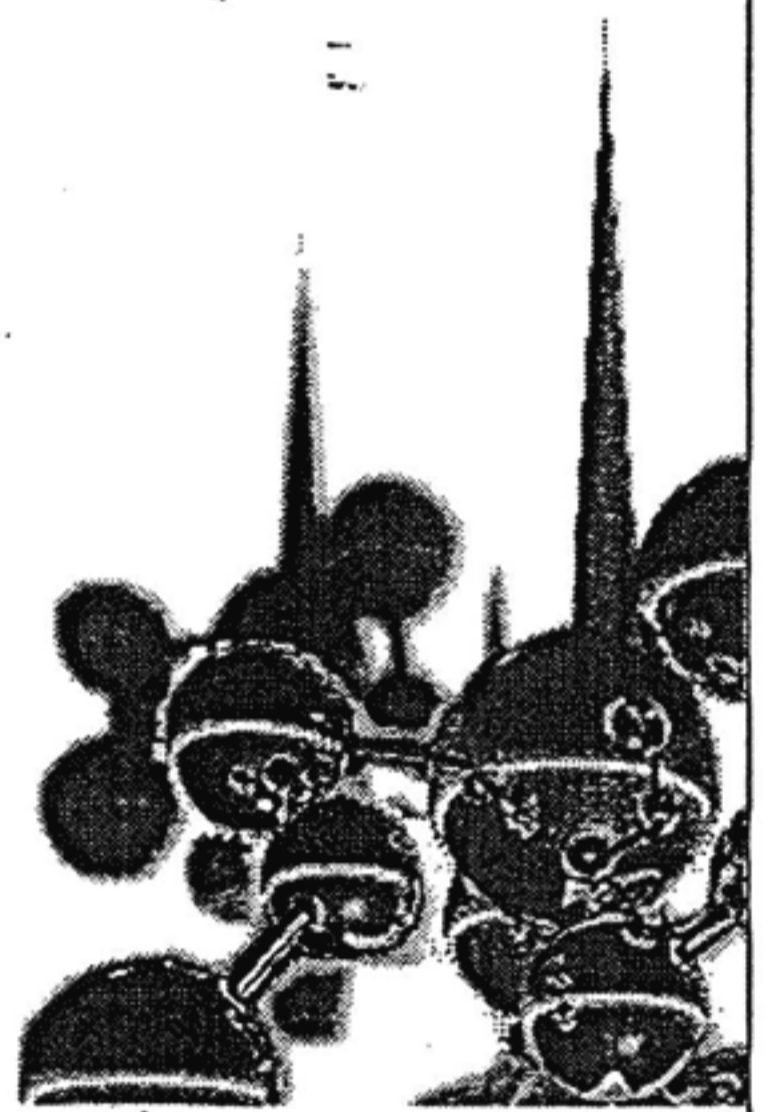


二、情報出版企業として

④イベント事業(下)  
幻の「TRON」電脳ファッションショー



超電導シンボルの成功の後、私の友人○○○氏が「湘南国際村」のことで相談があると訪ねてきた。「湘南国際村」とは、三井物産の大規模なリゾート開発構想だった。彼はリゾート開発会社に勤める中でその構想に係わっていたが、その一部に建設予定の国際会議場付き国際交流センターの開発コンセプトへの助言を求めたものだった。私は、情報インフラとして「TRON」(東京大学の坂村健教授が提唱する国産OS。マイクロソフト社に対抗するものとして注目された。)が使えないかと考えた。昭和六十二年初頭のマスメディアの科学関連のトップニュースが高電超電導なら、その年の暮れは「TRON」だったかも知れない。文部省が小学校にパソコンを導入しそのOSに「TRON」を採用するという発表を行ってからは、坂村教授は若さと才能に加えカリスマ的個性でマスコミの寵児となっていた。私は坂村教授に手紙で主旨を伝え一週間程後に会うことが出来た。坂村教授と三井物産の担当者との会談はその約一ヵ月後の昭和六十二年十二月に目黒雅叙園で実現したが、この計画は構想自体の縮小により日の目をみることはなかった。しかし、私はこの機会を生かし「TRON」構想をNTSの事業に戦略的に利用することを考えた。国際会議場付きビル建設は私の夢をかきたてるものでもあった。「千葉電脳都市計画」、「大村電脳都市構想」、「中部電脳別荘計画」等、「TRON」を応用した国際情報都市を建設するためのプロデュース事業を計画した。千葉のケースでは、日経産業新聞一面見出しトップで「千葉に電脳都市」の活字が踊った。

大村のケースでは市長、助役等市幹部、大手重工、ゼネコ他地元実力者なる人物も現われ、「長崎オランダ村(現ハウステンボス)」に対抗すべく壮大なプランが熱心に議論された。だが、いずれも「バブル崩壊」や「TRONの退潮」と共に跡形もなく消え去った。千葉の舞台となった「長柄ふるさと村」は親会社の倒産により、大村は市長の落選により雲散霧消し中部も尻すぼみとなった。そうした動きの中で「TRON電脳ファッションショー」と名付けたイベントも計画した。昭和六十三年夏、○○部長の入社直前のことである。当時の企画書にはサブタイトルに「プラスチック素材とコンピュータの新しい可能性を探る」とある。私は衣服の一部をプラスチックで作る、そこにハイテク機能を組み込んでどうかと考えた。又、衣服をスクリーンに見立てそこから音楽や映像が流れるという発想があってもよいではないかと考えたのである。真面目に衣服に取り組みむ向きからは眉をひそめられそうだが、遊び心でもあった。ファッションショーにはファッションプロデューサーが必要である。「M・ハイファッション」の秋元編集長に推薦を依頼した。彼女はSUNデザイン研究所の大出一博氏を選んだ。日本のショーの七、八割を手懸けるといふ絶対的存在である。会うと存在感も際立っていた。やがて、東京大学の坂村研究室で二人は出会うことになった。だが、残念ながらこれも実現しなかった。イメージが先走り過ぎていたことや、イベント企画のノウハウに関する私の無知も要因の一つだった。今ならウェアラブル(着る)コンピュータはポピュラーな用

語となりつつあり、ハイテク素材もより豊かである。状況はもう少し企画に有利に作用したかも知れない。こうしたイベント事業が上手くいかなかったのは「バブルの崩壊」や「TRONの退潮」もさることながら、企画の「情報発信力」の弱さが最大の要因であった。動機に社会的必然性がなかったためとも言える。要は、イベントをNTSの事業に戦略的に組み込もうと意気込んだ割には、テーマをとらえる時代背景への感性や企画を絞り込む技量も甘く、プロデューサーとしての立ち回りもお粗末なものであった。「情報発信力」とはこれらの要素の総体ともいえる。情報を核としそこに人と物が加わったものがイベントであると前号で述べたが、その核の力が弱い時人と物だけが無用に増殖して破滅に向いかねないのがイベントの恐さである。情報とは人々に「価値」をもたらすものである。「価値」を生まない情報が、それに係わる人々を幻想で囲い込み無用な物の氾濫を生むという構図はイベントに限らない。バブルを生んだ産業社会の構図も、売れない本が在庫の山を築く現代出版不況の構図も基本的には同じなのかも知れない。イベントを事業として積極的に育てようとした試みは上手くは行かなかったが、その過程で多くの友人と出会うことが出来た。イベントを地で行くようにドラマティックな人生を歩む意志の女性、バルクの小坂修子氏、過激な女性舞踊集団ロマンテイカの舞台演出を手掛けるユニーク個性の黒ちゃんこと黒田隆氏、長崎の街を連れだつて歩けばどこからでも女性の声がかかる不思議キャラクターのパバズミュージック社長中村聡氏(作家村上龍氏のマネージャーでもある)、彼らからはとりわけ鼓舞されるものがあった。彼らの生活力旺盛な生き生きとした仕事ぶりとおして出版人としての自分自身の生きざまを振り返ることもできたような気がする。まさしくイベントとは企画者の生きざまなり人間力を問われる事業なのであった。私がイベントに係わる間に時代は昭和から平成に突入した。NTSは第四期から第五期目を迎えるようとしていた。

掲示板

社内清掃について  
次の日程で、本社事務所内の床掃除を行いますので宜しくお願い致します。当日休日出勤の予定がある場合は作業に支障がありますので、必ず総務部に連絡して下さい。  
十一月二十八日(日)  
十二月二十六日(日)

平成十一年忘年会実行委員会からのお知らせ

今年も残すところあと六十日となりました。一年の疲れを癒し、また交友を深めるために忘年会を左記の要領で開催することとなりました。皆様の多数のご参加をお待ち申し上げます。(参加の確認及び、詳細につきましては十一月中旬に改めてご連絡させていただきます。)  
日 時 一九九九年十二月九日(木曜日)  
午後六時から午後九時  
会 場 池之端文化センター(湯島)  
幹事代表 編集企画部

編集後記

秋のGIが始まった。皮切りは女王の座をかけて戦う「秋華賞」。本命が伸び悩んだ結果、九万円馬券になった。ギャンブルにタラレバは意味がないが千円買っていたら九十万円である。今年はどうやら荒れ模様。「天高く馬肥ゆ」、馬体重を気にしながら一発狙ってみたいものである。(伊)

NTSニュース一九九九年十月号(通巻十六号)

一九九九年十月二十五日発行